

研修型エンカウンター・グループにおける書き言葉

高橋紀子

(九州大学大学院人間環境学府)

キーワード：研修型エンカウンター・グループ、書き言葉

1. はじめに

研修型エンカウンター・グループ(以下、EGとする)では、メンバーの気持ちや状態を把握する上でセッションアンケートを用いることがある。この直接的な出会いの合間に表現される書き言葉の扱いはファシリテーター(以下、Faとする)によって異なり、その機能や取り扱いについて論じたものは少ない。

また、携帯メールやインターネットの掲示板等の利用が日常化された今、他者との関わりの中にある書き言葉について改めて検討することの意味は大きいと思われる。

そこで本稿では、直接的な他者との関わりが中心となるEGにおけるセッションアンケートの役割とその取り扱いについて検討することを第一の目的とする。また第二に、セッション中にも書き言葉が使用された事例から、書き言葉と話し言葉の関係について検討することとする。

2. グループ構成

本グループは、某看護学校の2年生を対象に、3月の学外の研修施設において集中合宿形式(3泊4日、9セッション、25時間)で実施した。メンバーは9名(A~I)全員女性。社会経験がある27歳のAを除く8名は20~21歳。Faは筆者、CoFaは20代男性。

3. アンケート

メンバーへのアンケートには、野島(1994)の参加者カードとセッションアンケートを用いた。

参加者カード：参加前と後に、その時の気持ち(自由記述)とグループへの参加意欲と期待をそれぞれ「非常にある(7)」から「まったくない(1)」の7件法で尋ねた。

セッションアンケート：各セッション終了時に6項目(自分の動き・感情の流れ、Faについて、満足した点等)それぞれ自由記述を求め、セッションへの魅力度を「非常に強く感じる(7)」から7件法で尋ねた。

4. 経過

(1) 参加前アンケート

参加意欲は平均3.78 (SD=0.97)、期待は4.11 (SD=0.92)。自由記述では7名が「何をするのかわからないのが不安」。

(2) グループ・プロセス

全体会・1日目昼：オリエンテーション

#1・1日目昼 魅力度平均4.7 (SD=0.9)

<何をするのかわからなくて不安に感じてる人もいるみたいだ

ね>。簡単な導入後全員の自己紹介。名前、嫌いな食べ物に最近のエピソードといった型が繰り返される。Aの発言をきっかけに看護職のイメージと心理士のイメージを伝えあう。休憩後G「テーマがある感じで話にくい」H「したいことを一人ひとつ言うってのは?」。話し合い施設内を散策することに。その後施設内の喫茶コーナーで談話。部屋に戻り、部屋を快適にする提案がでる(菓子が欲しい、机を真ん中に置こう)。

#2・1日目夜 魅力度平均5.8 (SD=0.7)

菓子や飲み物の積まれた机を囲み実習先の婦長の話。途中からAが場をファシリテートする。メンバーに話をふると表情で拒まれ、「あ、逸ったね」とあわてて話題を何度か取り消す。休憩後、CoFaが持参したジェンガをする。タイプの違うメンバーのやり取りが増える。

#3・2日目朝 魅力度平均5.9 (SD=0.8)

Cの提案からゲームを2つし、その後外に出てケードロ。休憩後部屋に戻る。I「何がっこんで聞いてもいいことなのかわからんから話せない」。Bの提案で紙に質問を書き折り畳んでくじにし(以下、質問くじとする)、一人1枚ずつひいてそれに答えることに。メンバーは一気に5、6枚ずつ書き込み中央に投げ入れる。質問は「何歳で結婚したい?」「好きなタイプは?」等。話した内容に関する質問(例えば?等)に話し手が答えを少しでも考えこむと、すかさず他のメンバーが「いろいろよね」「ってことで」ときりあげさせる。

#4・2日目昼 魅力度平均6 (SD=0.5)

B「体育館、他のグループも使うみたいだったので、私たちは前半に予約しました」。メンバー一同が外で待ってるからと部屋に呼びこくるが、一旦戻ってもらい「知らないうちにするのが決められるのは置いていかれた感じ」と伝え、話し合う。その後体育館で1プレー。チームを変えながら全員参加。戻ってから、質問くじの続きが提案される。<紙は必要?何かないの間が持たない感じがあるのかなあ>と聞くと椅子の固さ等の不満が出る。CoFaの提案で床に座る。小さな円になり雑談する。

#5・2日目夜 魅力度平均5.7 (SD=0.7)

お菓子を持ち寄り雑談後、沈黙がちになる。<今どんなことを考えてるのか聞いてみたい>。同じ沈黙でもまったくしてた人、焦っていた人がいる。その後また質問くじ。一人一人の持ち時間が長くなる。次の人も違う紙をひきながら話は前の人と関連づけるようになる。ひいた紙を何度か元に戻し、質問を選んでから答えるメンバーも。

#6・3日目朝 魅力度平均5.6 (SD=1.2)

余った質問くじを使う。真剣に話そうとする者、楽しい話題をする者、うとうとする者がいる。休憩を入れ、部屋を掃除し床に座る。本格的に眠るメンバーも。A「意味がなさやいけないとは思わないけど、こんなゆつくりするなら一人で本読んでいたほうがいい」。Aの役割意識。その後日韓関係、北朝鮮、ダウン症の子どもを産めるかどうかの話。寝ていたメンバーが目覚めてから進路の話。I「みんな看護士になりたいんだって思っ込んでた」

#7・3日目昼 魅力度平均6.3 (SD=0.7)

<アンケートではリラックスしてる人やグループの雰囲気か眠気を誘うと感じる人もいるみたい。私はアンケートを読んで知るところもあるけど、みんなは手探り。お互いがどんな気持ちでこの時間を過ごしてるのか話してみるのもいいかもしれない>。B「普段話さない人が話せるような場にした。みんなの声か聞きたい」と他メンバーに真剣に訴えかける。F「話せるようになりたい気持ちと話せないなあってので悩んでる」一人一人話した後、G「自分がどうみえてるのか知りたい」。Gの印象をフィードバックする。体育館でバドミントン。3コート用い、各試合ごとのペアの組み合わせ、対戦相手、審判、休憩する人を変える流れが自然に生まれる。

#8・3日目夜 魅力度平均6.7 (SD=0.5)

H「明日またバドミントンしたい」。明日のことは明日話し合うことに。質問くじが提案される。<紙に書くのって必要なこと?>D「先生と私たちとは感じ方が違うのかも」<かもしれないね。遠うから知りたいって気持ちが出てくる>。H「誰かが話してる時、自分もそのことについて考えてた」F「他の人はどうって聞きたくなる」ひとつの質問を皆で答えることに。質問は「結婚像」「どんな子どもに育てたい」休憩後「人生のbest3」。親戚の死、同性愛者との恋愛、人と話すのを恐いと恐ったきっかけ、生まれた場所の話等。涙ながらに話したり、聞きながら涙しながら一巡。I「話さないでおいた事はある。話せることを話せばいいんだって自信を持って思える」M「経験してないから本当にはわからないのかもしれないけど、真剣な話だから真剣に聞こうって..」D「ねえ、明日ってバドミントン?私こんなふうと話がしたい」

#9・4日目朝 魅力度平均6.8 (SD=0.4)

余った質問くじを開いて中央に並べ、その中から話したいことを選ぶことになる。円がきゅっと小さくなる。「今なら話せそうなことを話そうと思う (E)」とくじとは関連のない話したことを話す者も。G「人のこと、こんなに知りたい聞きたいって気持ちになれるとは思わなかった」、A「人とつながり大学にするには、自分から求めていくことも必要なんだ」。最後にFaよりいくつか申し送り事項(守秘義務、疲労)を伝へセッションを終える。

(3)参加後アンケート

EGへの満足度は平均6.8 (SD=0.4)。

4. 考察

(1) セッションアンケートの役割と取り扱い

本事例では、セッションでは環境への不満や自分についての発言は比較的活発であったが、他メンバーへの気持ちやグループの中での自分の感じはアンケートの中だけで語られる傾向がみられた。そこでアンケートで書かれた事項を、次のセッション開始時にいくつかフィードバックした(#7)。その際留意したのは、まず匿名性を保つことである。また複数の感想をフィードバックし、多様な感じ方が同等の価値を持って表現され受け入れられるよう心掛けた。なお、何度もセッションのフィードバックを行わなかった。なぜならこのやり方はセッションの話題を操作的に限定する可能性があり、また繰り返すとメンバーはアンケートでの表現に依存する懸念があったからである。

セッションのフィードバックは、過去の振り返りの意味合いも持ち「今ここで」の流れを抑制させる恐れもある。フィードバックをする際は、前回の具体的な事柄は取り上げず気持ちに焦点をあて、また現在形の表現にした。

(2) 書き言葉と話し言葉の関係

本事例では、お菓子・机→ジェンガー質問くじと間に物を置く構造が一貫してみられる。この「間に何かないと間が持たない状況」を直接扱うことには失敗したが(#4)、質問くじの意味について話し合い、何度も使い方を変更しながらセッションは進んだ。質問くじは場つなぎ的に消費されるものから、次第に内省的態度を促すきっかけとして用いられ、後半では話し過ぎない為の枠として機能した。

メンバーは相手にどこまで立ち入っていいのかわからず(#3)、相手の話を振り下げることを躊躇した(#2,#3)。質問くじを書くという行為により(1)相手を知ろうとする思いや行為が構造的に肯定され、(2)自己開示のためには、質問した「相手」ではなく「内容」を拒んだだけと捉えやすくなると考えられる。相手を知ろうとして傷つけたり、傷付くことを恐れる彼等にとって、書き言葉が必要な媒介だったのだろう。

質問くじの繰り返しは、常にメンバーに自己開示を強いる状況を作った。研修型EGの場合は特に自分を開かないメンバーのあり方を尊重する姿勢も大切であり(平山・村山,1992)、質問くじはそうしたあり方を難しくさせる。自分を開くことと開かないことが同等の価値を持って受け入れられ、その選択は個人の意志によることは確認される必要があった。本事例で眠たい人が横になれる為の室内を掃除(#6)はそうした意味を持つだろう。また、答えるくじの選別(#5)、「話せることを話せばいい」の発言(#8)があるように、このグループに必要なことをメンバーは充分に知っていたことも重要な事実であろう。